

千葉県八千代市
村上新山遺跡発掘報告書

1978

村上新山遺跡発掘調査団

村上新山遺跡 正誤表

頁	行	誤	正
11頁	9行	Ⅰ層は	Ⅰ層は
11頁	9行	Ⅱ層は	Ⅱ層は
11頁	9行	Ⅲ層は	Ⅲ層は
11頁	10行	Ⅳ層は	Ⅳ層は
11頁	11行	Ⅴ層は	Ⅴ層は
11頁	11行	Ⅵ層は	Ⅵ層は
11頁	12行	Ⅵ層は遺構	Ⅵ層は遺構
11頁	13行	Ⅰ層～Ⅴ層は	Ⅰ層～Ⅴ層は
11頁	下45 5行	2点が接合し、	2点不接合し、

序 文

緑濃きここ八千代の地に学園を建設することは私の永年の夢でありました。幸い適地を得て学校建設に着手すべく、千葉県教育委員会に埋蔵文化財の確認をお願いいたしました処、溝状遺構の外住居跡と見られる遺構が発見されたため、千葉県教育委員会文化課ならびに八千代市教育委員会社会教育課と協議の結果、急遽発掘調査を実施し記録保存をすることとなり、調査団長を平野元三郎氏に依頼し、昭和53年1月19日から現地調査が行われた。調査は厳寒の中で熱心に進められ全年2月4日調査終了確認が行われ、現地調査を終了し、鋭意調査報告書の作成を急いでおりましたが、此の度刊行の運びとなった次第であります。

この間、御指導をいただきました千葉県教育委員会、八千代市教育委員会に厚くお礼申し上げますとともに、調査に当たられた調査団の諸兄並びに補助員の方々に謝意を表すものであります。

昭和53年3月16日

学校法人 八千代松陰学園

理事長 山口久太

例 言

1. 本書は、八千代市村上 727 番地に所在する八千代松陰学園建設に伴う埋蔵文化財の発掘報告書である。
2. 調査は、学校法人松陰学園より委託を受けた「平野考古学研究所」（代表者平野元三郎）が主体となり、平野元三郎を団長とする「村上新山遺跡調査団」を編成し、去る昭和 53 年 1 月 21 日より 1 月 31 日まで調査を実施したものである。
3. 各項の執筆は、平野元三郎・谷島一馬・浅利幸一が分担し、項末に記名してその文責を明らかにした。
4. 現地における調査は、谷島一馬指導のもとに行い、写真・実測等の記録は谷島一馬・浅利幸一・鈴木英啓が行った。遺物の実測及びトレースは浅利幸一が担当した。
5. 調査にあたり多くの方々の御協力を賜わり、特に八千代市社会教育委員会・学校法人八千代松陰学園の関係各位に対し、調査団一同ここに改めて深甚なる敬意と感謝の念を表わしてやまない次第である。

調 査 団 組 織

調 査 団 長	平野元三郎
調 査 員	谷 島 一 馬
”	浅 利 幸 一
作業補助員	鈴木英啓・川口治美・川口静代・久古とり子・ 宇井こと・崎山とめ子・戸村はつ・椎名いわ・ 小関政子

本文目次

序文	1
例言	2
I 序説	5
1. 調査に至る経過	浅利幸一 5
2. 遺跡の地理的環境	〃 5
3. 遺跡の考古学的環境	〃 7
4. 調査方法と経過	〃 9
II 遺構と遺物	11
1. 1号遺構と出土遺物	浅利幸一 11
2. 2号遺構	〃 13
3. 遺構外出土遺物	〃 14
III まとめ	谷島一馬 16

挿図目次

第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡分布図	6
第2図 遺跡周辺の地形図	8
第3図 遺跡全測図	10
第4図 1号遺構実測図	12
第5図 1号遺構出土遺物実測図	13
第6図 2号遺構実測図	14
第7図 遺構外出土遺物実測	15

図版目次

図版1 上・遺跡近景（西側より）
下・遺跡近景（校舎屋上より）

図版 2 上・A墳（遺跡西側山林内）

下・C墳（ ” ）

図版 3 上・D墳（ ” ）

下・遺跡全景（校舎屋上より）

図版 4 上・1号遺構

中・1号遺構土層

下・1号遺構遺物出土状態

図版 5 上・2号遺構

中・2号遺構土層

下・2号遺構ピット内土層

図版 6 上・1号遺構出土遺物

下・遺構外出土遺物

I 序 説

1. 調査に至る経過

千葉県は近年人口の増加が著しく、特に千葉県中西部に位置する習志野市・船橋市・八千代市・千葉市は目覚ましいものがある。その要因としては人口増に対処するため首都圏のためのベッドタウン化が進んだことが考えられる。こうした人口増加に伴って教育施設の充実が早急に要求され始めた。

そうした要求に答える目的から、昭和52年1月学校法人八千代松陰学園が設立され、昭和52年1月その建設地を八千代市村上727番地付近に定めたのである。

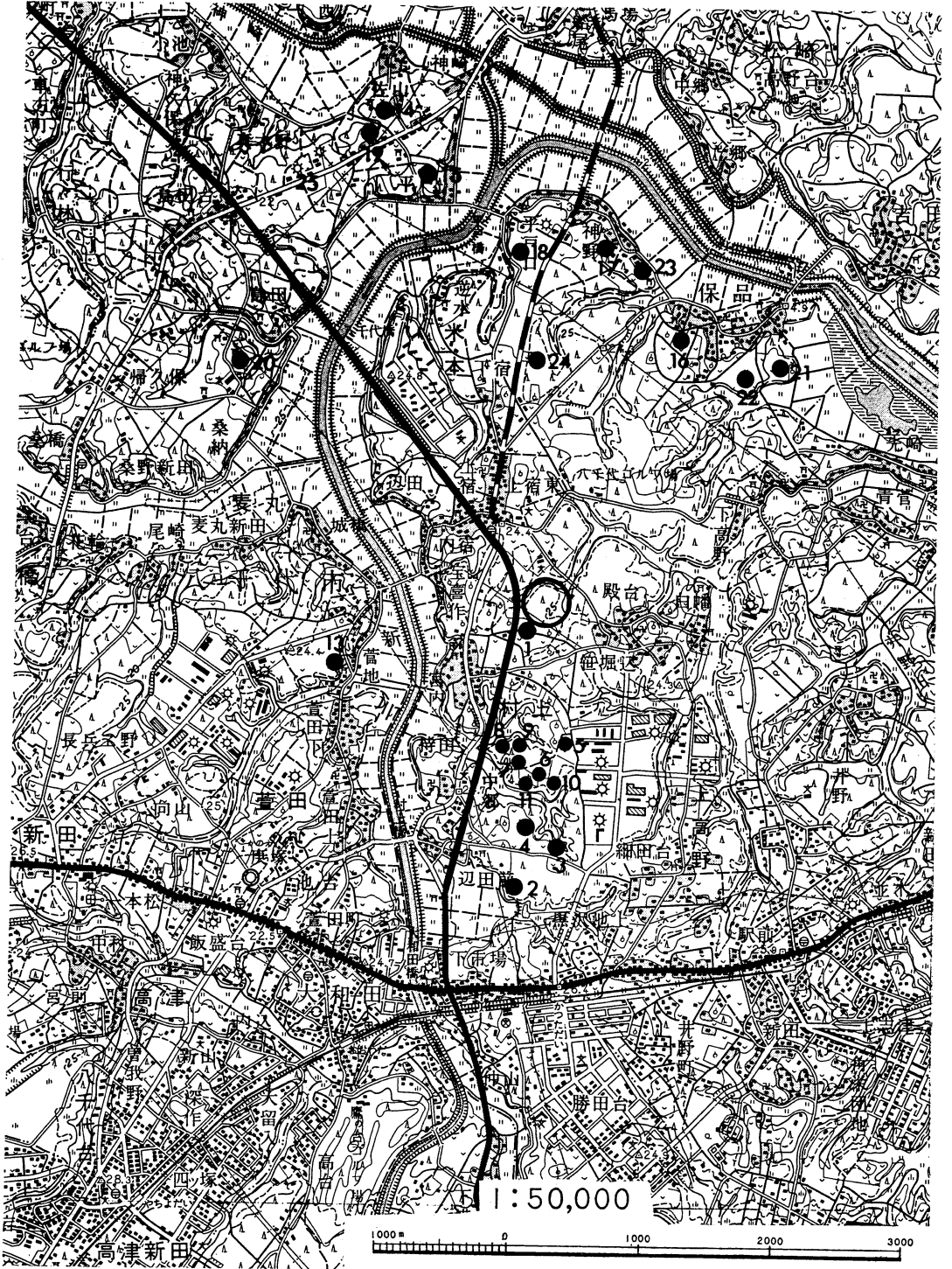
学園建設に先立って、建設予定地南側に宮内遺跡が隣接することから当地にも遺構の存在が疑われ、昭和52年6月より千葉県文化課立ち合いのもとに工事に着手したのである。そのさい校舎建設予定地北西辺部に円形プランと推定できる遺構1基を確認した。当初、松陰学園側は埋蔵文化財優先との立場から現状保存の措置をとり、校舎建設地を5m東に設計変更し建設に着手した。しかし、建設工事が進展するにつれて遺構確認地点が工事に支障を来し、学園開校まで数ヶ月と期間的な問題も有り早急に記録保存の必要が生じたのである。これを受けた県教育委員会は現状保存が困難であると判断し、記録保存の措置をとることに決定した。

学校法人 松陰学園理事長 山口久太氏の要請を受け、昭和53年1月日本考古学協会員 平野元三郎氏を団長とする村上新山遺跡調査団が組織された。

2. 遺跡の地理的環境 (第1・2図)

村上新山遺跡は八千代市村上727番地に所在し、千葉県の北半分を占める下総台地の北西部に在り、京成電鉄線勝田台駅より北方3km・八千代市役所より北東3kmの標高25mの台地上に位置する。

遺跡付近の地形は小支谷が複雑に入り組み、印旛沼より北西へ流れ出た新川が神崎川との合流点で南に大きく曲流して、八千代市を東西に二分して東京湾に注ぐ。その南北に流れる新川の東側台地上1kmに本遺跡が在る。台地西側は新川に連なる小支谷が入り



第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡分布図

組むが、今回の調査地域は台地東側に位置し、北方より入る支谷に面している。支谷は700 mほど北上し、下高野付近で東に大きく曲り、青菅・東辺田を経て印旛沼へ連なる。

調査地域の東・西側はそれぞれ1.5 mの段差で校舎建設によって削り取られ10×10mの舞台状に残存していた。北・西側は平坦面で松の生い茂る山林で、西側には4基の古墳ないしは塚が確認されている。

3. 考古学的環境 (第1・2図)

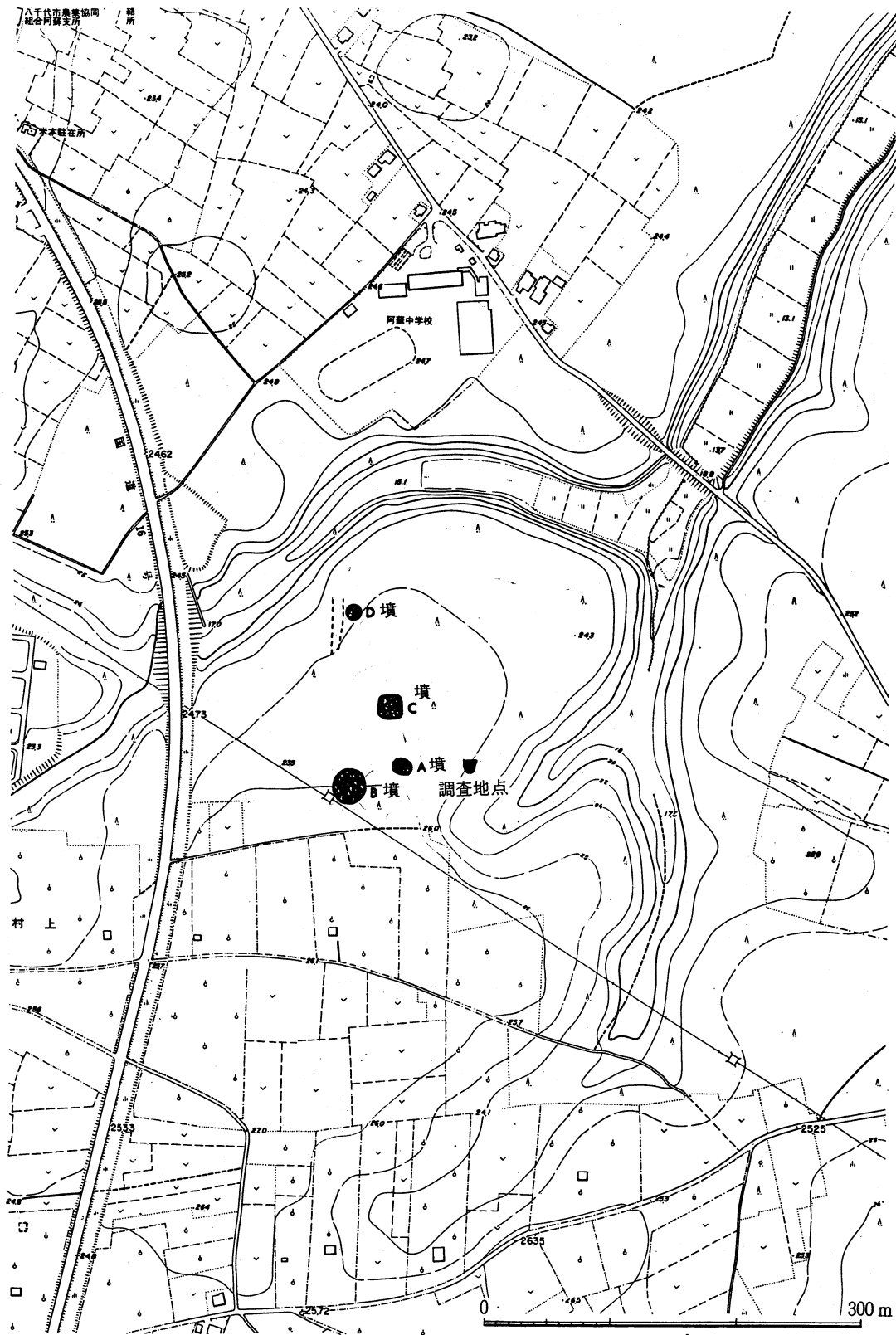
八千代市村上727番地に所在する本遺跡は南側で、1—宮内遺跡に隣接し、さらに南方約1～2kmの地域には、2—村上第1塚群・3—村上第2塚群・4—村上込の内遺跡・5—大塚遺跡(村上A地点)・6—村上B地点・7—村上C地点・8—村上D地点・9—村上E地点・10—村上F地点・11—名主山遺跡・12—村上供養塚などからなる村上遺跡群が点在している。また、新川を隔て西側1.5kmには、13—菅地の台遺跡・北側2～4kmの地域には、14—佐山貝塚・15—平戸台古墳群・16—保品郷遺跡・17—神野貝塚・18—平戸口遺跡・19—佐山台遺跡・20—睦小学校北方遺跡・21—おおびた遺跡・22—平台遺跡・23—保品栗谷古墳・24—神野比兵塚付近遺跡・25—真木野古墳などの縄文時代～近世に至る遺跡が数多く点在している。

村上地区の埋蔵文化財については不明な点が多かったが、地元の千葉県立八千代高等学校史学会諸氏による長年の地道な分布調査により、その存在が知られるようになった(註1)。

そして、近年の開発ブームにより村上地域の開発が急激に増加し、造成工事に先立って埋蔵文化財を記録保存すべく調査が盛んになった。

昭和46年8月、日本考古学協会員平野元三郎氏を団長として名主山遺跡発掘調査団を編成し調査が実施され、北関東系土器の出土と住居址が検出されている(註2)。

また、昭和47年2月日本考古学協会員市毛勲氏を団長とし、八千代市村上団地第1期造成工事対象区域内の遺跡を調査すべく予備調査が実施されている。その調査に基づき、昭和48年8月～49年1月まで記録保存すべく調査が実施されている。調査遺跡は村上込の内遺跡・村上第1塚群・村上第2塚群の3ヶ所で、本文608頁にも及ぶ膨大な報告



第2図 遺跡周辺の地形図

書が刊行されている(註3)。

今回の調査地点の西側山林に4基の古墳ないし塚が確認されている。調査地点より40 m西に、A墳一直径10 m・高さ1.70 mの円墳、さらに西30 mに、B墳一長径22 m・短径18 m・高さ2.78 mの円墳、それより北東40 m A墳より北へ28 mに、C墳一長径15 m・短径14 m・高さ2.63 mの方墳?、さらに北80 mに、D墳一長径8 m・短径7 m・高さ1.2 mの円墳がそれぞれ点在している。

また、D墳の西側傾斜面に、深さ30～80 cmで断面形は浅いU字形の土手を持つ、人為的に掘られた溝を確認した。これは台地東方から入る支谷に下る。

註1. 千葉県立八千代高等学校史学会「史学報一第3号一」 1972年9月。

註2. 名主山遺跡発掘調査団「名主山遺跡」

註3. 千葉県都市公社「八千代市村上遺跡群」 1974年2月。

4. 調査方法と経過

調査地域は学園建設内に東側と南側をそれぞれ10 mほどカットされ舞台状に残された地域で、造成前の地形から言えば台地平坦面から北方から入る支谷へ移行する非常にゆるやかな傾斜面上に在り、調査面積は10×10 mの100㎡と少なくない面積である。

県文化課の立ち合いにより埋蔵文化財の遺構確認を行ったさいにブルドーザーを使用したため上層をソフトローム上面近くまで削平し、南側はすでに円形プランの遺構が確認できるほど上層面をカット・攪乱しており、上層面での遺構・遺物の検出は不可能に思えたので、あえて小グリットを設定せず調査範囲の10×10 mを1グリットと定め、調査地全体を円形プランの確認できたソフトローム層上面までの排土作業から開始することとし、検出された遺構順に1・2と遺構番号を定め、昭和53年1月19日より調査を開始した。

昭和53年1月19～22日 遺跡遠景・近景写真撮影及び調査範囲のくい打ちをし、表土層の排土作業。

1月23～24日 1号遺構の排土と北側ロームにトレンチ設定。

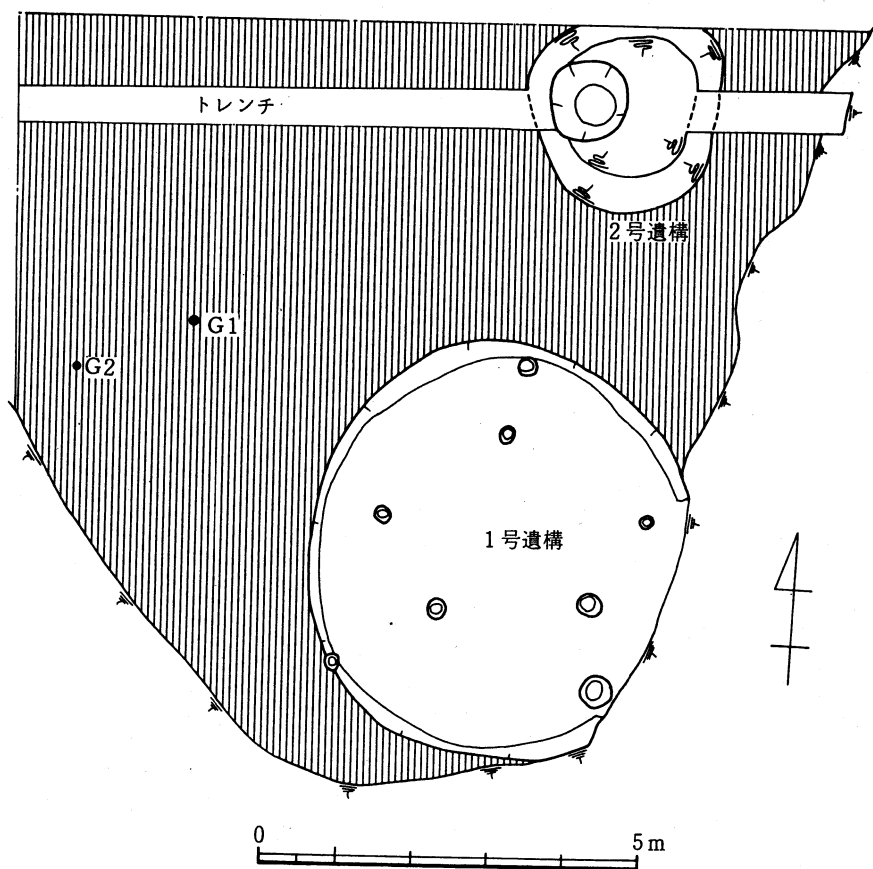
1月25・26・27日 1号遺構の排土と2号遺構の排土。

1月28日 遺構実測・写真撮影

1月29日 遺構実測及び遺跡北側・西側平坦面の調査

1月31日 機械を撤去し、遺跡周辺の写真撮影をし、調査を終了した。

(浅利幸一)



第3図 遺跡全測図

II 遺構と遺物

1. 1号遺構 (第4図)

本調査区の南側に在り、2号遺構の南2mに位置する。遺構はソフトローム層より5cm上層の暗黒褐色土層中で発見された。

平面形は東側壁面が大きく削平されているため全体を把握できないが、ほぼ円形で長径5.38m・短径4.78mを計る。長径の主軸方位はN-15°-W。壁は全体に傾斜し、傾斜角度は約70度を計り、軟弱である。壁高は北壁51cm・南壁は44cm・西壁は47cmを計る。

覆土は6層に分けられる。1層は暗黒褐色土層。2層は黒色土層。3層は暗茶褐色土層で黒色土を多量に混入する。4層は暗黒褐色土層でロームブロックとローム粒を少量混入する。5層は茶褐色土層でソフトローム質土層である。6層は暗茶褐色土層でロームブロックとローム粒を多量に混入する。6層は遺構中央部の凹面に張り床を構築するかのよう堆積し、1層～5層は自然堆積したと考えられる。

床面は、ハードローム層を5cmほど掘り込み構築され、中央部がやや窪み非常に軟弱で踏み固めた様子はどこにもない。

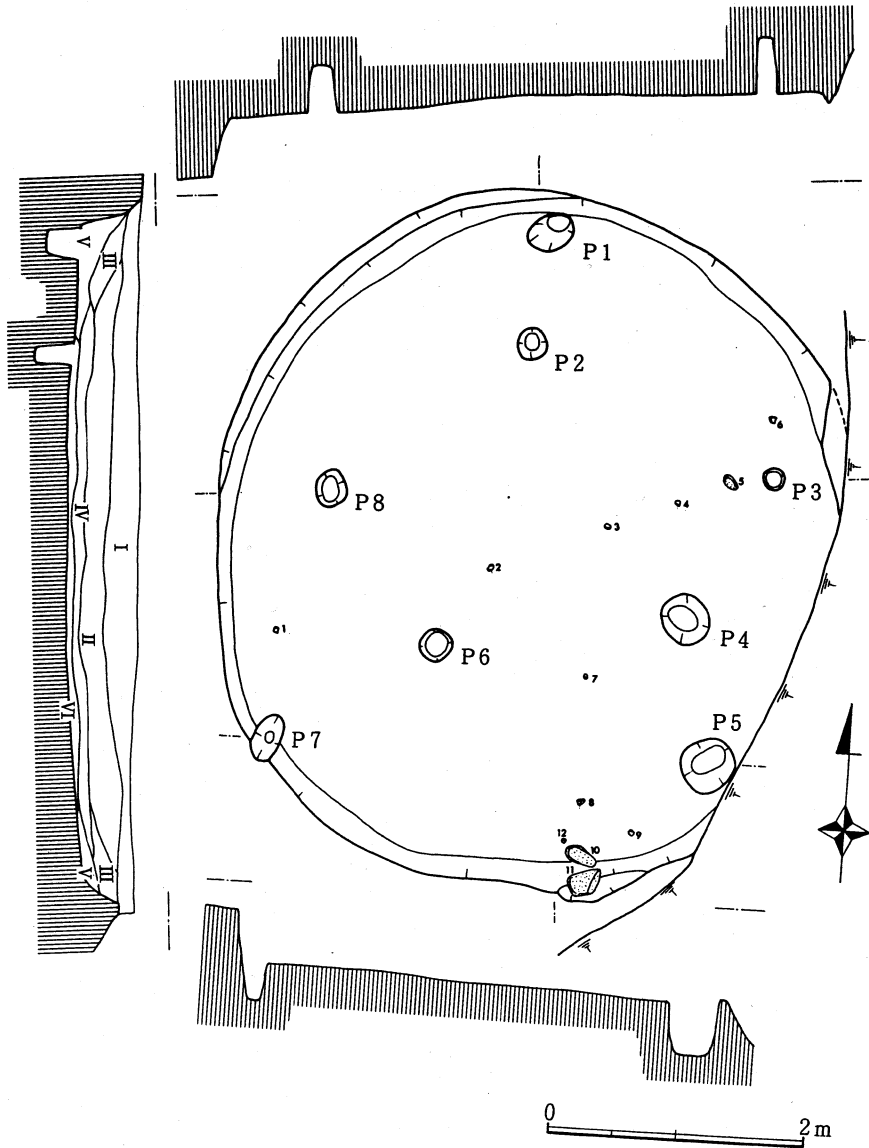
ピットは8個検出した。P1は楕円形で37×27cm・深さ25.5cm。P2は円形で24×22cm・深さ42cm。P3は円形で17×15cm・深さ42cm。P4は楕円形で41×34cm・深さ15.5cm。P5は円形で43×41cm・深さ40cm。P6は円形で23×23cm・深さ17.5cm。P7は長楕円形で36×19cm・深さ28.5cm。P8は不整形円形で31×25cm・深さ34.5cmをそれぞれ計る。炉址は無い。

遺物は12ヶ所より検出された。土器片5点でいずれも破片である。石が7個で2個体である。10・11より検出した大型の石器2点が接合1, 1・2・7・8より検出した石片が10に接合する。

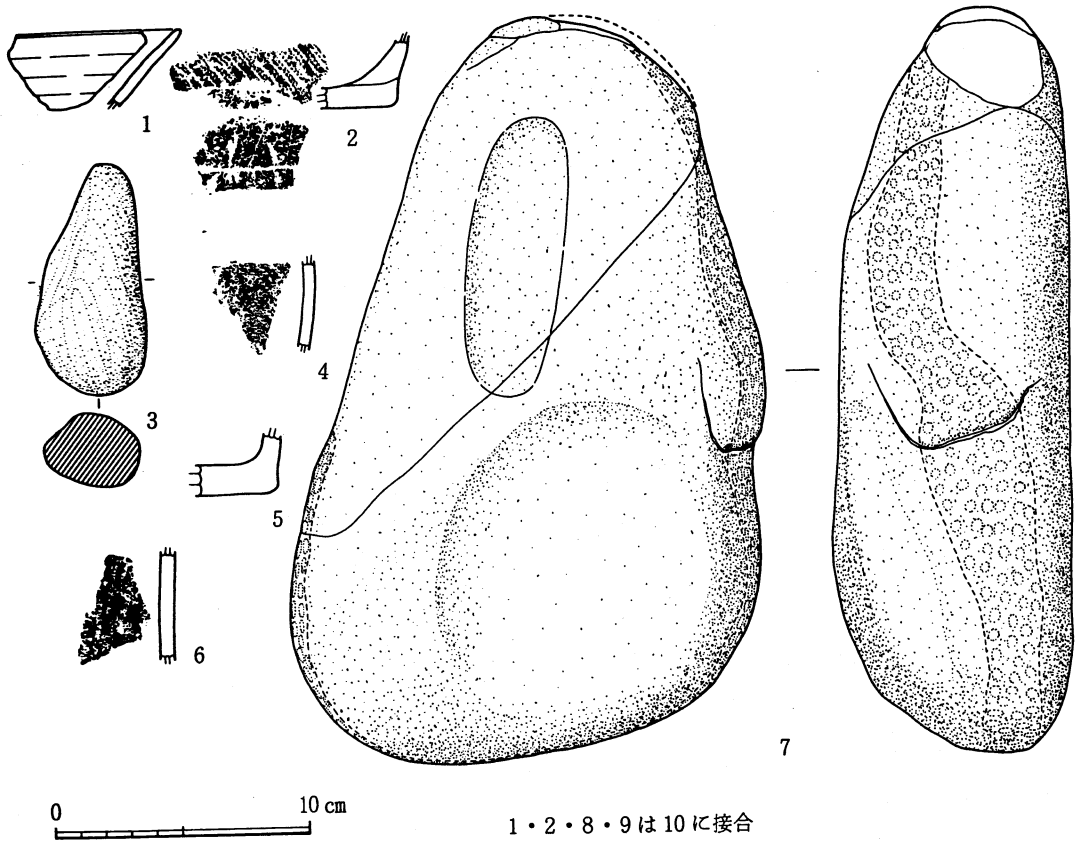
出土遺物 (第5図)

1は土師器片で坏の口縁部の一部で赤褐色を程し、内外面共横ナデである。出土位置は3で床面上20cmの2層より出土した。2は土器片底部で縄文が見られ、底部は木の

葉底である。出土位置は4で床面上42cmの1層より出土した。3は石で加工痕は見られない。出土位置は5で床面上5cmの4層より出土した。4は土器片で撚糸文が見られる。出土位置は6で床面上8cmの4層より出土した。5は土器片底部で出土位置は7で床面上8cmの4層より出土した。6は土器片で外面に縦方向のナデが有る。出土位置は



第4図 1号遺構実測図



第5図 1号遺構出土遺物実測図

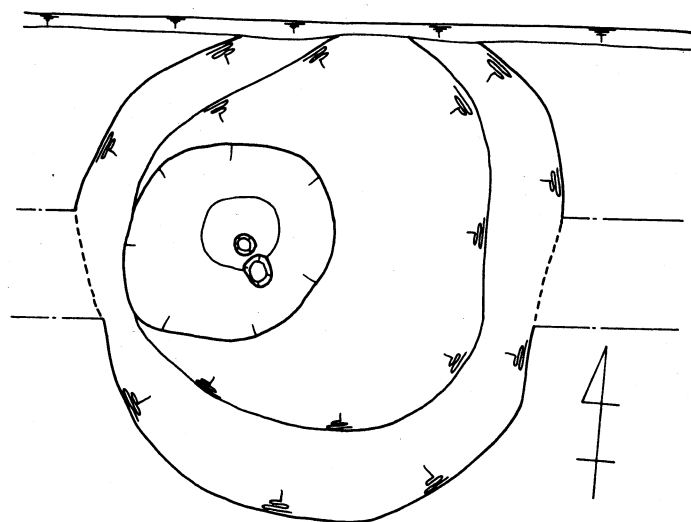
12で床面上3cmの5層より出土した。7は軟質砂岩の大型石器で1・2・8・9出土の小破片が10・11出土の石に接合し6個体からなる。3/4周に打撃痕が明瞭に表われ、平坦面2ヶ所に磨痕がある。

2. 2号遺構 (第6図)

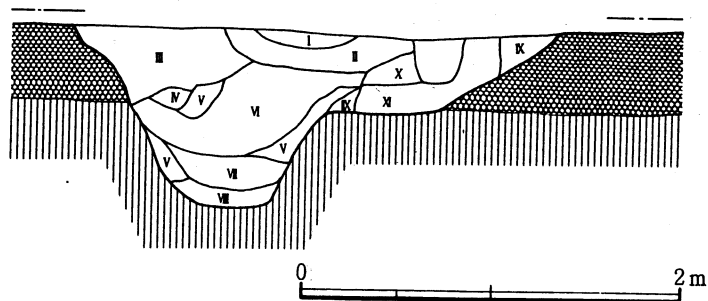
本調査区の北側に在り、1号遺構の北2mに位置する。遺構はその覆土がソフトロームとほぼ同色の暗茶褐色を程するためソフトローム層上面で確認できず、ソフトロームにトレンチを掘った時に確認された遺構である。

平面形は、北壁の一部が調査区域外にまたがるが、ほぼ円形で長径3.55m・短径3.53

m・深さ45cmを計る。
 壁はゆるやかに傾斜し
 床面へ移行する。東側
 部に長径1.10m・短径
 1.05m・床面よりの深
 さ77cmのピットが在
 り、ピット内中央に直
 行10cm・深さ20cm、
 壁を切り込み直径15
 cm・深さ5cmのピット
 2個が検出された。



土層は11層に分けら
 れた。I層は暗茶褐色
 土層。II層は暗茶褐色
 土層で黒褐色土が少量
 混入する。III層は暗茶
 褐色土層でローム粒や
 黒褐色土を多く混入す
 る。IV層は茶褐色土層。
 V層は暗茶褐色土層で

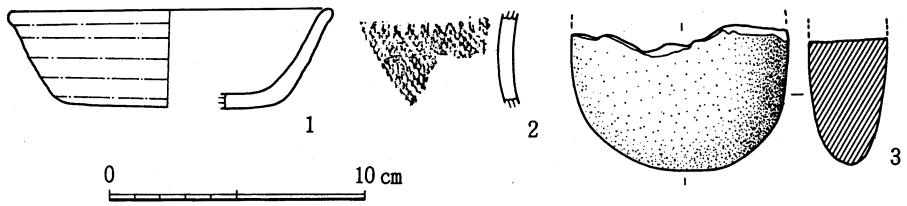


第6図 2号遺構実測図

黒褐色土を多く混入する。VI層は茶褐色土層でブロック状のロームが多量に混入する。VII層は暗茶褐色土層で少量の黒褐色土を混入する。VIII層は暗茶褐色土層でローム粒と褐色土の混合土層。IX層は茶褐色土層で少量のロームブロックを混入する。X層は暗黄褐色土層でロームブロックに黒褐色土を少量混入する。XI層は暗黄褐色土層でやや大きめなロームブロック土層である。出土遺物はない。

3. 遺構外出土遺物 (第7図)

1はグリット1地点のソフトローム上3cmより検出された坏形土器である。口径12.8



第7図 遺構外出土遺物実測

cm・器高 3.9 cm・底部厚 0.6 cmを計る。色調は明褐色を呈し、胎土は粗密、焼成は良好で底部は静止ヘラ切り整形である。

2はグリット2地点の攪乱層・ソフトローム上 10 cmより検出された縄文土器片である。胎土は密で、焼成は良好である。

3は磨石で南側削平面に露出して検出された。

(浅利幸一)

III ま と め

当遺跡の発掘調査に至った直接の動機は、第1号遺構の一部が造成工事中に露呈し、住居址ではないかと予測されたからである。調査はこの遺構の確認を主目的として実施されたわけであるが、関連遺構を把握する為に調査範囲を北西域に広げ、さらに北側に一本のトレンチを設定し、このトレンチの東側から土壌一基が検出された。この二つの遺構の検出が主な成果である。

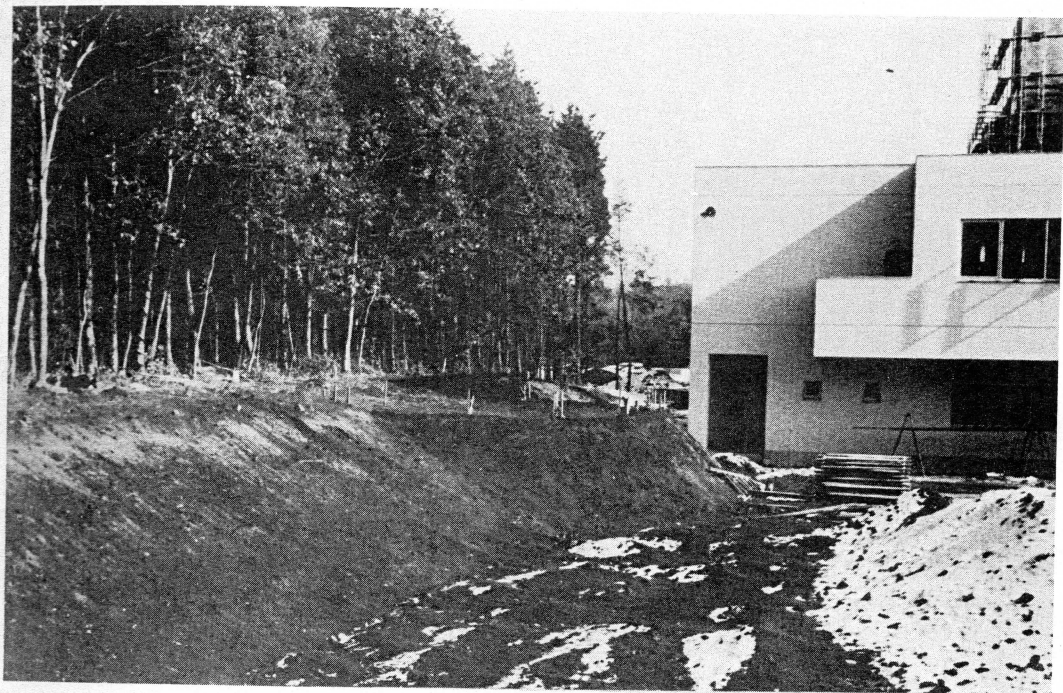
この二つの遺構の性格について検討してみると、第1号遺構は形態・規模共に弥生時代の住居址に酷似し、一見同時代の住居址の様に看取されるが、床面は軟弱で全く踏みしめられた痕跡が認められず、壁面も床同様軟かく覆土と識別するのに苦勞する様な状態であった。これは床の場合も同様で床面の把握は容易ではなかった。内部施設では炉址は検出されず、各ピットの位置も柱穴に断定するにはやや無理で住居遺構としての諸条件は具備されない。

平面形態・規模・掘り込みの深さ等弥生期の竪穴住居址に酷似するが、上述の如く遺構内の状態から推して、竪穴住居址として認定することは適当ではなく、住居址以外の目的をもって掘り込まれた竪穴であろう。確認された範囲に於ては如何なる機能を果たした遺構であるか不明である。

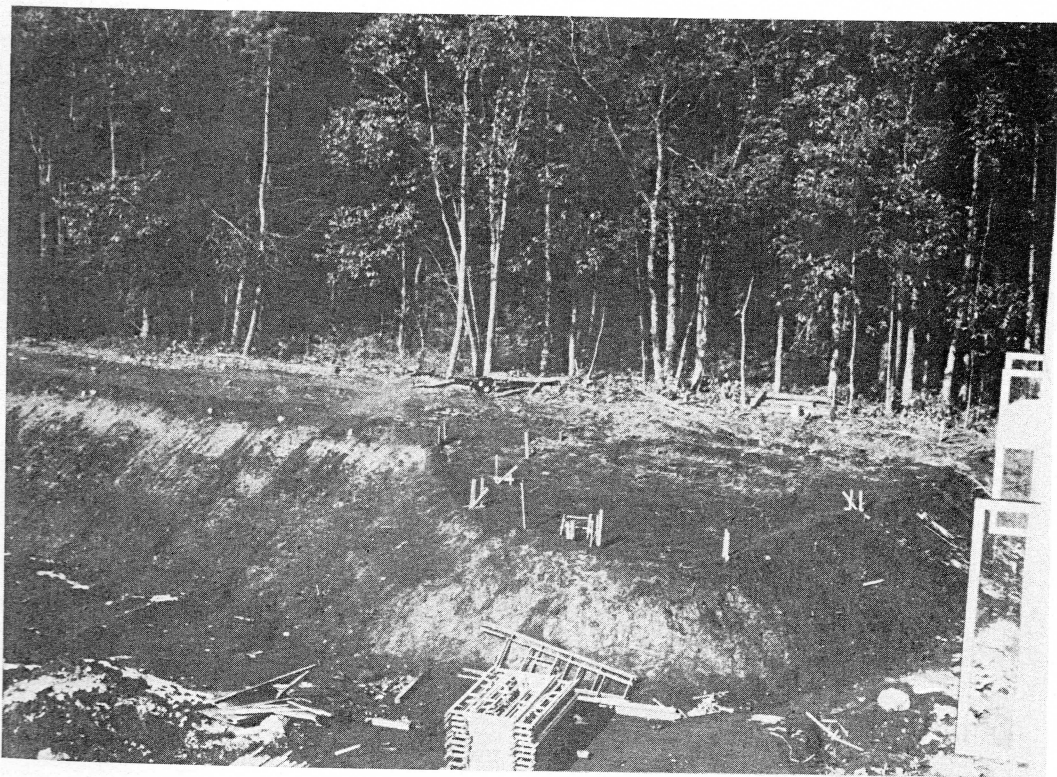
本遺構の所属年代についても出土遺物の大半が流入によるもので、遺構に密着した資料は土師器と考えられる小破片と玉砥石と考えられる砥面に浅いU字形断面を有する大形の加工石の2点である。この2点の資料で判断するならば古墳時代に比定されよう。

次に集落との関係については約50mの距離で4基の古墳が分布するが、この古墳群と時代的に併行する集落の存在は当然考えられ、本址もその集落址の中の一遺構との想定は可能である。又、本址に隣接して検出された土壌も遺物は全く検出されず性格及び時代の決定は出来ないが、上記竪穴状遺構と同時代か、それ以降の所産と考えられる。

(谷島一馬)



遺跡近景（西側より）



遺跡近景（校舎屋上より）



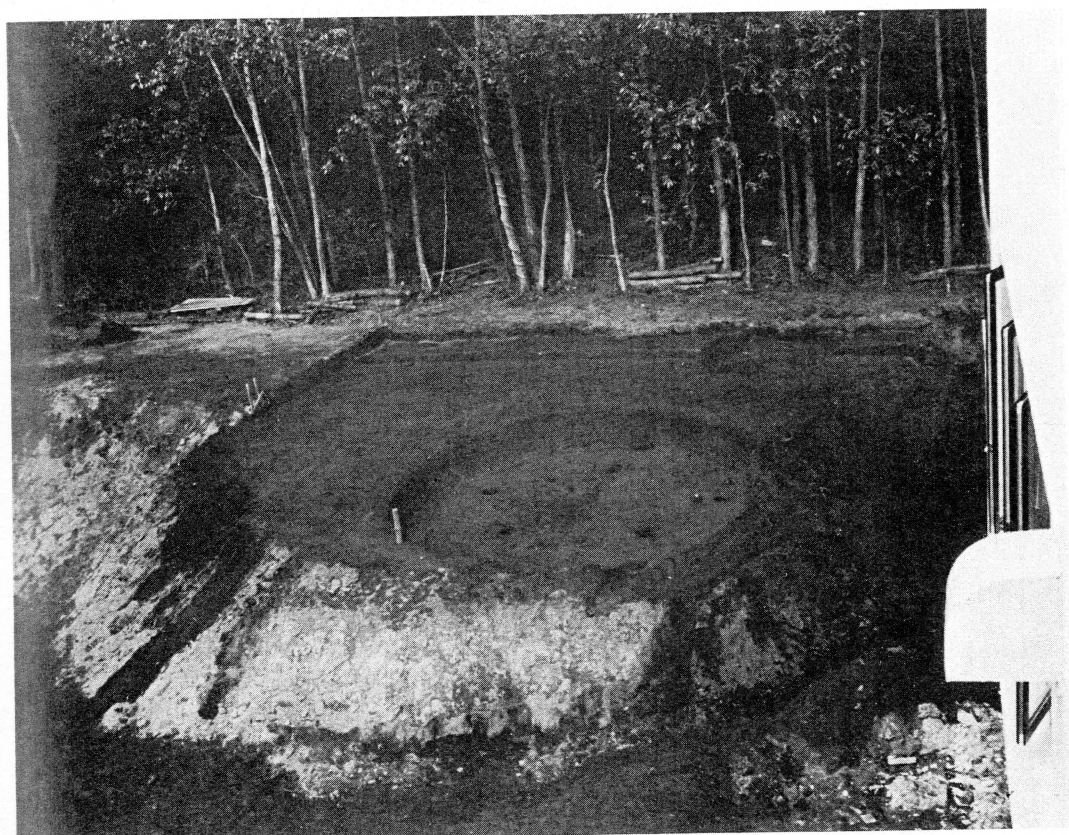
A 墳（遺跡西側山林内）



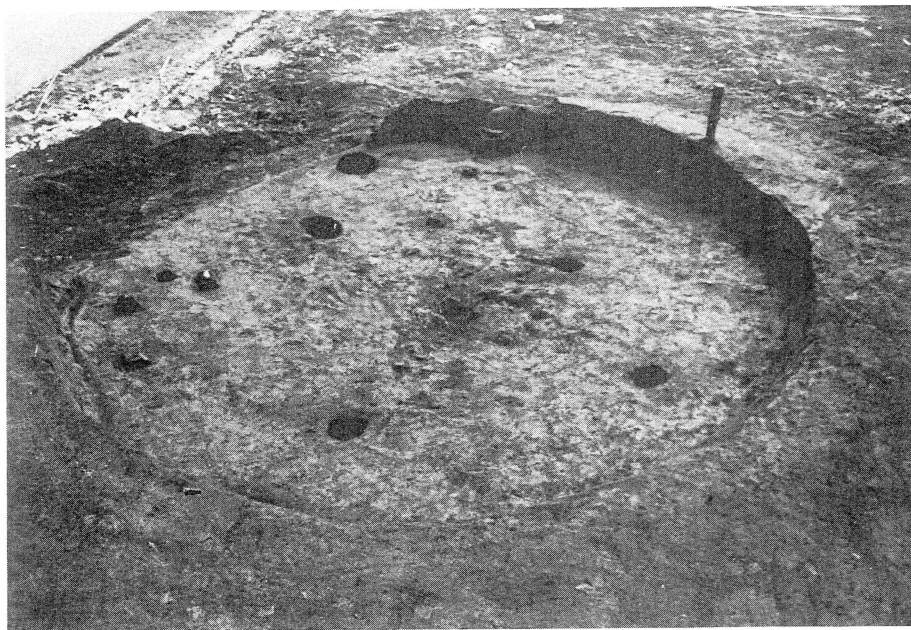
C 墳（遺跡西側山林内）



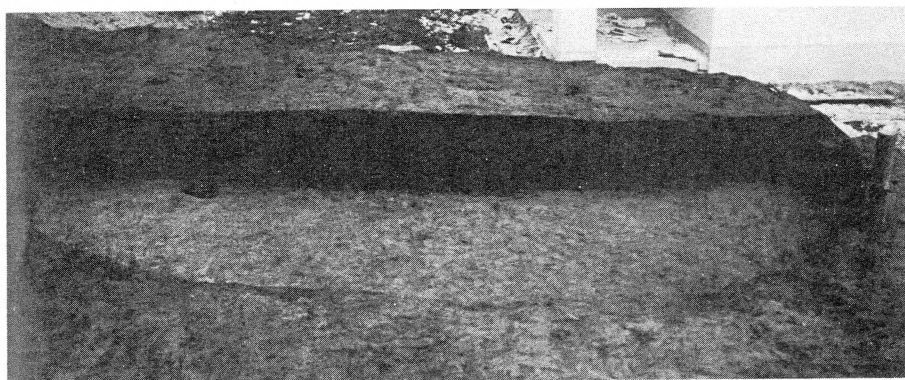
D 墳（遺跡西側山林内）



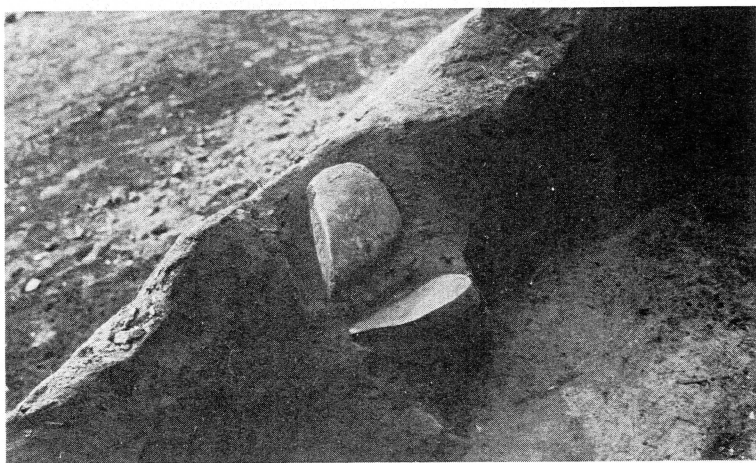
遺跡全景（校舎屋上より）



1 号 遗 構



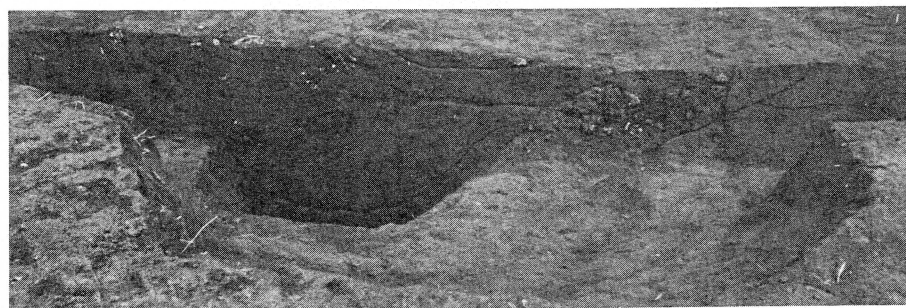
1 号 遗 構 土 層



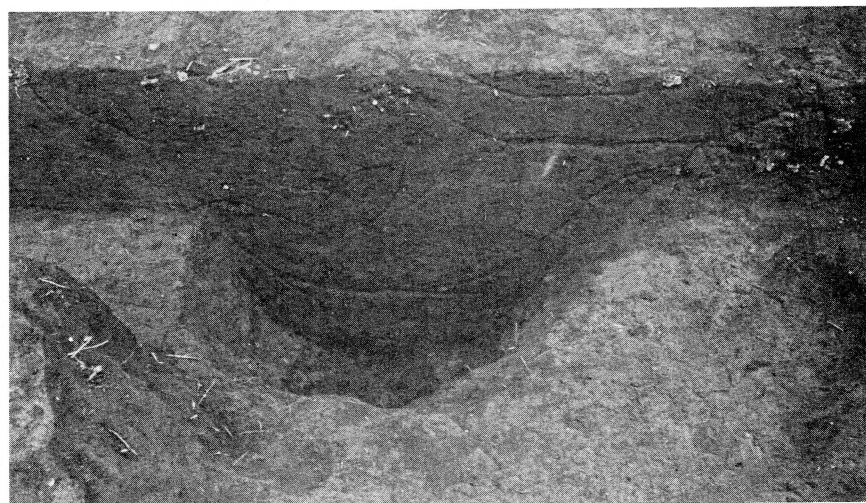
1 号 遗 構 遗 物 出 土 状 态



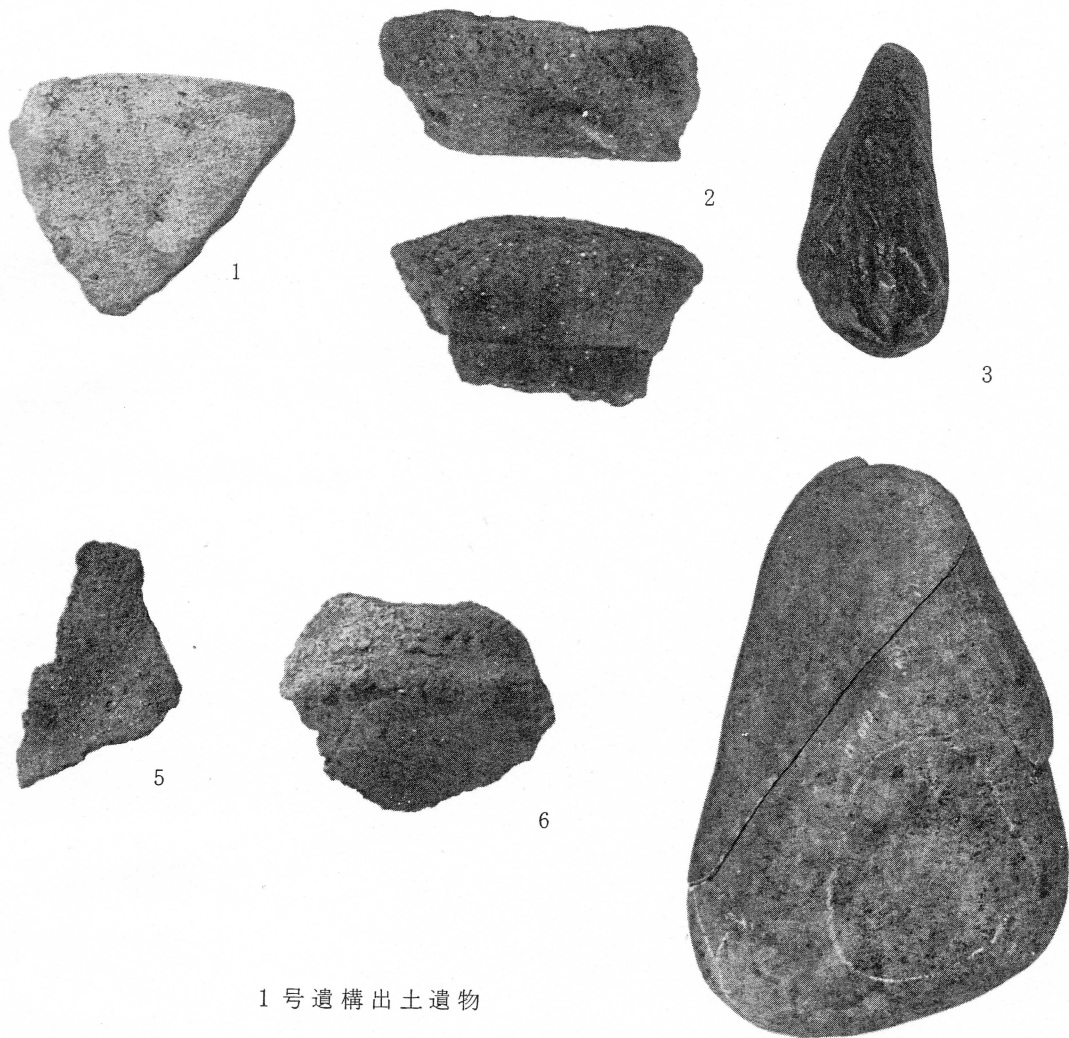
2 号 遺 構



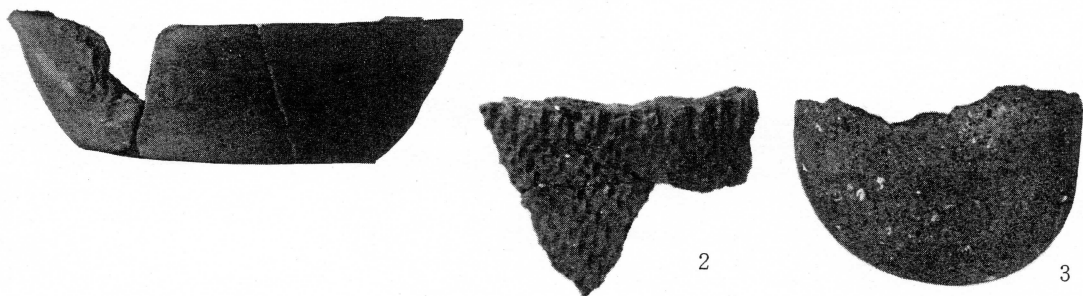
2 号 遺 構 土 層



2 号 遺 構 ピ ッ ト 内 土 層



1号遺構出土遺物



遺構外出土遺物

村山新山遺跡発掘調査報告書

昭和 53 年 3 月 25 日 印刷

昭和 53 年 3 月 31 日 発行

発行者 平野考古学研究所

印刷所 三陽工業(株)市原支店
千葉県市原市五井5510の1